

定年俳句誌

4 2012年  
月 号

かたね  
ふ



# 黒羽集

(四)

佐藤喜仙

武蔵野に詩の立ちあがる四温かな

武蔵野の枯淒まじく彩失せし

上水の音を引き出す冬堇

せせらぎの音に疵なく枯桜



土手道に光を惜しみ水仙花

川の辺のほとりをつづる枯尾花

閑雲や枯木影さす寒の鯉

皇帝ダリア空引きよせる小春かな

冬夕焼苑の櫂の梢高し

雪嶺の山河をはるか武蔵野よ

# かせね集

白選句集



プラタナス

松本周二

少年の返事明るく春立てり

蒼穹にメタセコイヤ聳つ雪世界

そこここに雪折のある陽射しかな

人減りてなにやら寂し鬼やらひ

枝移り小鳥の雪を落としけり

騎士立てる姿や雪のプラタナス

# 冬景

川井素山

梅古木

安藤虎醉

水しぶき船頭うたふ炬燵舟

下萌に踵弾ませ歩みゆき

新酒入荷張紙白き鄙の店

友禅の絵柄にしたき濃紅梅

そう麺のすだれの如き寒の入り

呆然としばし聞きゐる猫の恋

傾ぐほど牡蠣をつみたる帰り舟

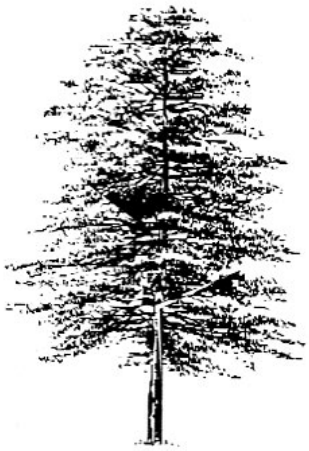
老いて今やすらかに妻と春を待つ

新しき土竜の穴や土手青む

普段着のままゆつくりと梅見かな

節分に小声でそつと豆を播き

梅古木けなげにも早や花をつけ



# 撫子集

## 主宰選



公園の池の清掃春浅し

田島昭久

人知れず遅れ咲きたる金縷梅かな

春の雪道路の隅に残りをり

まだ咲かぬ梅の廻りを木瓜の花

豆腐売りラツパの響春の暮

車窓よりこぼるる富士の淑気かな

小林美登里

稽古笛枯野にひびく夕べかな

スカイツリーその寒影の長きかな

青空を背に赤々と木守柿

人生の給油の時間日向ぼこ

裸木の枝伸びやかに並木道

本郷宗祥

鬼の面夫がかぶりて節分会

球根の芽まで押しあぐる霜柱

老梅のつぼみゆるりとふくらみぬ

春浅し肩をすぼめる通勤者

春隣夕餉の菜の一つ増え

小池清司

吟行の小用怵へる寒さかな

銀輪の薄氷割る通学路

双清の絵手紙にのる春の声

梅三分鼻近づけて車椅子

病棟の夜の静寂や春の猫

岡野安雅

雪落し身震いするや跳ぬる笹

参拝の二拍を裂きて猫の恋

駅前はマスク溢れてはやり風邪

老農夫野焼の煙に影写し

# 那須野集

## 主宰選



雪解の雫途切れぬ大樹かな

米田文彦

首筋にぬくもりのあり小六月

柳田皓一

凍道を足元みつめ急ぎ行く

風やはし薄氷揺るる池面かな

雪解光竹跳ねあがる音しきり

爛酒をまず調のへる妻の留守

小春日や何もかも忘れひた走る

縁に出て体を癒す小春かな

舞ひ上がる落葉の焚火薄煙

男等の黙し手かざす焚火かな

牡丹の芽風をいなして芯光る

坂上じゅん

野を行けばやはらかな音草萌ゆる

吉田啓悟

料峭や靴下白き女学生

街路樹の银杏芽ぶくや昼の月

大津絵の弟子の少なき涅槃絵図

白藤の鬱と暮れゆく都心かな

早春の長瀬よりの嶺の雪

薄氷に白い羽毛のてんと

残照の洋館そめて日脚伸ぶ

露天風呂湯気に溶けぬる牡丹雪

丸山酔宵子

つり橋に光はねあげ春の水

松本信子

雪しまく浅間の煙りなほ白し

五十年の人生絵巻春の夢

気高かる雪嶺染める夕日かな

暖かや社の屋根の松皮茸

輝ける風花の舞ふ山の朝

春潮に遊びしままに舫ひ舟

雪晴れて輝き眩し朝の庭

菰ぬちに咲き満ちてをり冬牡丹

春浅き房総に咲くあらせいとう

青木英林

生垣の椿一輪通勤路

後藤克彦

節分の真夜中に貼る願ひ札

下萌の日ごと広がる土手の道

水仙と潮の香りや波高し

春野菜目利買ひゆく京の店

軒先に剣のごとき氷柱かな

春の庭土竜動き出し土起す

蔵開き予期せぬ雪と良き地酒

分校の春の校舎に声聞かず

暖かや川の淀みに雲の浮く

金田和代

魚沼の銀舍利光る春の膳

長島清山

露の臺身をつつましくかたまりて

浅春や鍋囲みをる親子の声

野田藤の数百畳にしだれけり

老いてなほストレイシープか花の下

夕霞瀬音の中の峽の宿

リビングに咲くシクラメンその気品

網代垣めぐらす庭の紫木蓮

原発で働く人にも春は来ぬ

温もりを求めて集うおでん鍋

吉田博行

下萌やともににぎはう子等の声

菊池崇之

ふうふうと焼芋食うぶ子供の顔

幼子も声高らかに鬼は外

梅の香のほのかににほう散歩道

梅の香はそぞろ歩きの小径まで

枯草の庭に子供等踏み遊び

下萌を愛でつつ急ぐ通い道

紫雲英摘む母の姿のまなうらに

郡山真帆

寒厨に妻の粥煮る地震の国

佐々木薫

雨に濡れ白がひときは躑躅山

春の海時には高き波頭

房総のあらせいとうに潮の風

春の雨部屋薄暗き連子窓

雪の宿粗朶ちらちらと燃えてをり

春近しインクの匂ふ俳書かな

風花や刷毛目きつぱり石の庭

父の年越えて畑を耕せり

辻 紅葉

暮をならぶ遅日の縁や猫脇に

松岡利秋

岬鼻に春風受けて犬と立つ

冬の霧そのあいまひの中に居る

三が日芥少なき暮らしかな

妻無しの猫と戯る春の宵

街中に風の一陣鳥雲に

初時雨本堂奥の盧舎那仏

花冷や共には行けぬ別れ道

撫子集・那須野集鑑賞 二月号より

客員 村上克哉

撫子集

大ぶりの鱈さばかれて鍋地獄

本郷宗祥

鱈は北日本以北の深海魚、十二月〜二月頃が旬、鱈のぶつ切りに葱や豆腐などを入れて大鍋でぐつぐつ煮上げた鱈ちりだが、鱈の身になればぶつ切りにされ、豪快に煮上げられ、まさに地獄。でも冬には欠かせない鍋物だ。下五で決まった。

退院の足で三年日記買ふ

小池清司

退院をくぎりに、来年を改まった心構えで迎えようと日記を買った。三年日記は前年を振ることも出来、長過ぎもせず手頃だ。来る年に対する意気込みが伺える。

水煙にふれんばかりの冬銀河 小林美登里

冬の北空に低く北斗七星が立ち上がり、カシオペヤ座が高く昇っている、南天にはオリオン座、ひと目でわかる木星などが鮮やかに眺められる。仏塔上部の九輪の一部の火炎状装飾、水煙にふれんばかりに立ち上がったのは北斗七星か、木星か、情景がよくわかる。相輪、九輪と言わず水煙と言って句の詩情が広がった。

夕刊を開きみかんの皮を剥く 岡野安雅

蜜柑と言えば一般的には温州蜜柑をさすが、暖地性の柑橘類の総称で、最も普及しているフルーツ、晩秋に収穫する。夕食後或いは湯上りに、夕刊を読みながら蜜柑を剥いているのか、如何にも寛いでいる様子。蜜柑を剥く為に夕刊を開いたと思いたい。(以下略)

# 伝言板

## 1 第三回本部句会(原則第二金曜日)

①日時 2012年3月9日(金)

14:00~17:00

②場所 目黒区「下目黒住区センター」

3階会議室(別添地図参照)

③投句 当季雑詠 5句

④会費 1000円

## 2 第四回本部句会

①日時 2012年4月13日(金)

14:00~17:00

その他事項は第三回に同じ

## 3 吟行(2012年度吟行方針)

毎月同じ場所を吟行し、日本の四季の微妙な変化を認識する。なお今年度は吟行後の句会は行わない。

①第三回吟行(原則第四火曜日)

日時 2012年3月27日(火)

13:30~15:30位

## ②第四回吟行

日時 2012年4月24日(火)

13:30~15:30位

その他事項は第三回に同じ

場所 新宿御苑  
集合 新宿御苑正門前  
入場料 各自負担 200円



## 4 「かさね」友の会の皆さん

投句をされる時、裏面に「友の会の声」

欄がございますので、句評、近況報告、ご意見などご自由にお寄せください。なお友の会の皆さんは特別作品(十句)、随筆、その他論文等をいつでも投稿することができます。お待ちいたしております。

## 会員募集

何時からでも「かさねの友」になれます。

年会費 12000円(前納)

ただし年次途中入会者は入会申し出の翌月より12月まで月割りで納付

見本誌 四百円(切手可)

見本誌請求先

15210033

東京都目黒区大岡山2-7-5

かさね俳句会 佐藤喜仙

# 「かさね」俳句の基本

## I 前提

- 一、俳句は世界最短の「詩」である。
- 二、有季・定型・文語体を旨とする。

### ① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

### ② 有季の原則

#### 原則①

「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

#### 原則②

「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を『表季語』と称する」

#### 原則③

「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてはその語彙は季語とは見做さない」

#### 原則④

「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

#### 原則⑤

「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

### ③

## 文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

## II 俳句の約束事

### 一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。

現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

### 二、表現

主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

### 三、地名・固有名詞

地名・固有名詞は一句の中にあつて季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

### 四、三段切

形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。

例 完全な三段切

奈良七重七堂伽藍八重桜

芭蕉

三段切でも可

初蝶来何色と問ふ黄と答ふ

虚子

### 五、前書・ルビ

前書は慶弔の句にのみゆるされる。ルビは誌中では使用しない。

## III

### 俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。